

三浦綾子『氷点』『続氷点』

——ベストセラーの要因——

渡 邊 かおり

はじめに

三浦綾子『氷点』（初出『朝日新聞』一九六四・一二・九～六五・一一・一四。朝日新聞社、一九六五・一一）『続氷点』（初出『朝日新聞』一九七〇・五・一二～七一・五・二〇。朝日新聞社、一九七一・五）は主人公・陽子が〈原罪〉そして〈赦し〉を知る物語であると言われ、一千万円という破格の懸賞小説受賞作であること、さらに受賞者が「北海道の雑貨屋さんのおばさん」であることから、大きな反響を呼んだ。その人氣は、「さいご」には「ヨウコハシンデハナラナイ」、あるいは「ヨウコラシナセナイデ」と、けなげな陽子の姿に共感した読者たちから熱烈な電文をおくられる⁽²⁾ほどであった。ところで、これほどの人氣を誇った作品のテーマが、〈原罪〉であるという点は見逃せない。これまでもキリスト教文学という観点から、『氷点』『続氷点』の示す〈原罪〉に対する論が繰り返されてきた。

田川健三は『批判的主体の形成』（三書房、一九七一・八）において、遠藤周作と三浦を比較し、三浦のキリスト教観念を浅はかであると批判した。新約聖書学者として名高い田川の論は三浦批判の代表とも言え、上出恵子も『三浦綾子研究』（双文社、二〇〇一・三）に

おいて田川の論を引用し、一応の同意を示した。田川を除いては、三浦の宗教観に批判的な論はほとんど見られない。佐古純一郎「三浦綾子」（『国文学 解釈と鑑賞』第五〇巻一〇号、一九八五・九）、水谷昭夫「原罪をみつめる清冽な心——『氷点』（『三浦綾子全集』第一巻、主婦の友社、一九九一・七）、岡野裕行「三浦文学におけるキリスト教信仰と布教」（『国文学 解釈と鑑賞』第七四巻四号、二〇〇九・四）は、『氷点』が信仰の文学として成功していると論じた。

ただし近年では、『氷点』が〈原罪〉という概念の表現に成功してはいるものの、それが読者に伝わったとは考えられないとする論も多く見られる。尾崎秀樹「三浦綾子文学の魅力」（『国文学 解釈と鑑賞』第六三巻二号、一九九八・一一）、道下晃子「三浦綾子『氷点』論・成功した「失敗作」下」（『国語教育論叢』第一九巻、島根大学、二〇一〇・二）がその代表だろう。

以上のように先行研究では、一部批判的な論もあるが、ほとんどが『氷点』『続氷点』を〈原罪〉の表現に成功しているとして、高く評価している。確かに三浦自身が、「私としては原罪というキリスト教の思想を何とか訴えたいという気負いがあった」と述べている以上、〈原罪〉が『氷点』のテーマであるという点に間違いはない。

しかし、果たして〈原罪〉がベストセラーの要因だと言えるだろうか。

尾崎秀樹は「もつとも三浦綾子が基督者として信仰の場で体得した。原罪⁽⁴⁾の意識が、そのままのかたちで一般読者に共感されるとは思えない」と述べている。確かに『氷点』を読んだだけで〈原罪〉を正確に理解できる一般人が多いとは思えない。つまり、多大な読者を獲得した理由が〈原罪〉にあるとは考えにくいのである。では、『氷点』ブームの要因とは、一体何なのか。本稿では、作品を読み解き、さらに時代背景を重視し、『氷点』『続氷点』がベストセラーになった要因を解き明かしたい。

一 罪の混合

——〈原罪〉と〈自罪〉——

辻口啓造の妻・夏枝は辻口病院の眼科医・村井靖夫と密会していた。そのとき夏枝は長女・ルリ子を家の外へ追い出してしまふ。この夏枝の失態こそが、『氷点』のはじまりであった。夏枝と村井の密会の場面には、「結婚して六年、夫以外の男性にはじめて口づけを頬に受けたことが、夏枝の感情をたかぶらせた」とある。つまり夏枝は、村井を心から愛しているというより、恋愛の刺激を楽しみ、退屈な日常、すなわち家庭からの逃避行を望んでいるのだ。尾崎秀樹は夏枝の罪について、次のように捉えている。⁽⁵⁾

同じ残酷でも、現実にごこかの家庭でおこなわれているかもしれない程度の残酷さであり、そのいづれもが、ほとんど未遂におわっていることも『氷点』のしめす残酷のワク組を、ある程

度暗示してくれるのではないか。

つまり、夏枝の罪はある程度日常的であり、読者にとって理解しやすいものである。また、黒古一夫は、次のように述べている。⁽⁶⁾

『氷点』成功の最大の理由は、まさにこの人間存在の根源に關わる「原罪」問題をキリスト者固有の世界に限定せず、広く人間の普遍的問題として捉え直し、作品のテーマとしたところにあったのである。

原罪を「広く人間の普遍的問題として捉え直し」すことができたのは、夏枝の罪が一般人にとつて共感しやすかったからだろう。

親の姦通を罪として背負う陽子より、自らの姦通を罪として背負う夏枝の方が、明らかに理解しやすい。そんな夏枝の存在は、『氷点』を通俗的にし、純文学としての評価を下げてとも言える。しかし、それがかえつて罪の存在を分かりやすくし、大衆文学の親しみやすさとキリスト教文学の難しさのバランスを取っているのだと考えられる。

つづいて、陽子の義父・啓造について述べたい。ルリ子の遺体が発見された川で、啓造がある事実を思い出す場面を引用する。

やはりこの川原だった。啓造が十七か八の夏だった。近所の八つぐらいの女の子を連れて、この川に泳ぎに来たことがあった。(略)

啓造はつとめて自然に、女の子をひざに抱きかかえると、

「誰にもいっては、いけないよ」
とおどすようにひくくいった。(略)

それ以来、その女の子は、啓造の顔を見ると逃げるようになった。(略)その時、啓造はその子が何かの急病で死んでくればよいと思った。誰にも知られずに殺すことができるものなら、殺したいとさえ思った。

(犯人の佐石とおれと、どれだけのちがいがいるのか)(略)

(医学博士の辻口啓造も、殺人犯人の佐石土雄も、結局は同じなのだ)

「医学博士の辻口啓造も、殺人犯人の佐石土雄も、結局は同じなのだ」という一文を読むとき、読者は自らにも何かしらの罪が潜在していることに気づかされるはずだ。陽子の原罪だけを描くのではなく、夏枝、啓造のようにごく一般的で共感のしやすい「罪」が散りばめられることによって、〈原罪〉への理解がしやすくなっているのだと言える。

ここからは、ルリ子を殺した男・佐石について論じる。佐石は、不遇の人生を歩んでいた。関東大震災で両親を失い、大凶作の影響で、タコ部屋を転々とするようになった。そして結婚したものの、妻は出産直後に他界する。佐石は妻の死後二〇日間、ほとんど眠らず、道路工事の仕事と赤ん坊の世話が続けた。そしてある日とうとう赤ん坊の泣き声に耐えきれなくなり、赤ん坊を置いて外に出たところ、ちょうど夏枝に追い出されたルリ子に遭遇したのだった。

そもそもタコ部屋とは、どういったところであったのだろうか。上野英信編『近代民衆の記録——鉦夫』所収の「蛸部屋労働手記」

に描かれている、佐藤金太郎の手記を引用したい。

……自分が此の家に来た時主人が前金を貸すと言ったが何程貸すのかと尋ねて見たら、現金では貸さぬ、此所に来てから北海道に行く迄の間毎日の弁当代、其他菓子、煙草等を差し上げるのが前金だと其の人が言ふので自分も二度吃驚……。此の他現金として借りたのは、汽車に乗つてから煙草代其他菓子代として一円と、武田の部屋に居る一週間の内に一円五十銭を借りたに過ぎず……。只の二円五〇銭現金前貸に依つて六ヶ月間慣れない仕事を犬猫の如く終日働かされる人の心情を察する時、一掬の涙なきを得んや。

そして佐藤金太郎はほぼ毎日、午前二時から午後七時まで、トロ押し(トロッコ押しのことであると予想する)をさせられた。少しでも立ち止まれば暴力を振るわれ、それに対する治療は施されなかったという。佐石はわずか一六歳にして、このような過酷な状況に置かれた。それも二三歳で入隊するまで、実に七年間もである。

確かに、どのような状況下にあつても人を殺すことは許されない。しかし、佐石は悪意があつてルリ子を連れだしたわけではない。震災、凶作、大戦など、時代と環境に起因する不幸に耐えられなくなり、衝動的にルリ子を殺してしまったのだ。もし、佐石がこれほどまでに不遇な人生を歩んでいなければ、ルリ子を殺すことはなかったはずだ。

時代によって罪を犯してしまった人物は、佐石だけではない。陽子の義理の父・三井弥吉もまた、その一人である。弥吉は戦時中、

中国北支で妊婦の腹をかき裂くという大罪を犯した。この残酷な行為は、弥吉の意志で行われたものではなく、上官に銃で脅されて行つたものだった。銃を背に突き付けられるという恐怖の中で、弥吉は普段の弥吉ではなかつたはずだ。このように考えると、弥吉を強く責めることはできない。弥吉と佐石の罪は、個人の悪意ではなく、戦争、そして貧困という社会問題が引き起こしたと言つても過言ではないのだ。

ここまでの論を踏まえ、登場人物を〈罪〉の種類によつて三種類に分けたい。その前にまず、『新カトリック大事典』により、『原罪』の意味を確認する。

全人類は罪の支配下にあり、人間は誰も罪人である。自分の責任下に自由意思を悪用して自罪を犯すことは誰にも避けられないが、さらにそれに先立って人は誰もが初めから神の祝福のない罪人状態に生まれてくるのである。

これを踏まえ、「自分の責任下に自由意思を悪用して自罪を犯す」人間を①、「初めから神の祝福のない罪人」を②、社会から強いられて罪人になつた者を③とすると、以下のような区分になる。

①夏枝、啓造、恵子

②陽子

③佐石、弥吉

では、この三区分は、『氷点』にどのような効果を与えているのか。

先に引用した『新カトリック大事典』の説明からは、〈自罪〉と〈原罪〉が微妙に異なるものであることが分かる。〈自罪〉は自らの意志によつて犯す罪であり、〈原罪〉はアダムとイブの罪によつて引き継がれる無意識の罪である。すなわち、①や③のように、人間の嫉妬心、征服心などによつて引き起こされる罪が〈自罪〉であり、②のように血によつて引き継がれる罪が、〈原罪〉なのである。

つまり、『氷点』において真の意味での〈原罪〉にぶつかるのは陽子だけであり、その他の登場人物が向き合うのは〈自罪〉なのだ。ここに、『氷点』の不徹底さがある。作者である三浦綾子は、『氷点』のテーマを〈原罪〉だと明言した。しかし、三浦は〈原罪〉と〈自罪〉の微妙な違いを無視し、〈自罪〉に苦しむ人物を多く散りばめながら物語を進めた。結果、『氷点』は「原罪」そのものではなく「原罪」の問題をあまい糖衣につつんで提起した」と評価されてしまったのである。

では、もしも『氷点』が〈原罪〉をより深く正確に追求した作品であつたならば、これほどのブームが起きただろうか。結論から言うと、起きなかつたに違いない。たびたび述べているように、陽子の〈原罪〉は共感がしづらいからだ。それよりも、夏枝や啓造が示すささいな嫉妬や怒りのような〈自罪〉の方が身近であり、共感がしやすい。また、③の佐石、弥吉も、読者に戦中・戦後の苦しみを思い出させ、共感を引き出す役割を果たしている。

『氷点』は、〈原罪〉を示しきれなかつたからこそ、大衆に受け入れられた作品だと言えよう。

二 神と信仰の物語

陽子は幼いころからよく辰子の家へ通っていた。辰子の家の茶の間には、「学校の教師、医者、銀行員、商店主、新聞記者など雑多な職業の男たち」が集まる。そこでの議題は、美術、音楽、文学、哲学など、多岐にわたった。

本文には、「夏枝は、辰子の茶の間の、この雰囲気嫌っていた。しかし陽子は、何となく活き活きとした感じが好きだった」とある。ここに、戦前の女・夏枝と、戦後の女・陽子の差がある。社会に出ることなく、「女」として生きることを強いられた夏枝にとって、大衆性に溢れる連中は受け入れがたかったのだろう。一方、陽子は幼少期から辰子の家に来ることで、社会の縮図を学ぶことができた。辰子の茶の間は、陽子が「女」という型にはまらず、自由に生きるための学び場であり、辰子自身も陽子にとって大きな心の拠り所であったと言える。

また、啓造が一人葛藤したり、心細さを感じたりすると、それを知っているかのように辰子が登場するということが頻繁に起こっていることにも注目したい。それは、ルリ子の死後（『水点』「灯影」）、陽子を引き取った直後（『水点』「ゆらぎ」）、夏枝と不仲のとき（『水点』「千島から松」）、啓造が協会に入るかどうか迷っているとき（『水点』「階段」）の四度に渡る。しかもその度に辰子は啓造的に確かなアドバイスをを行い、啓造が罪と向き合うための助けとなっているのだ。啓造はその度に、「辰子の前にでるとなぜか自分の心にひどく素直になる感じだった」、「陽子が薬を飲んで以来、今日ほど安らいだ気持ちになったことはなかった」などと感じている。

陽子の心の拠り所となり、啓造が迷えるときに必ず現れる辰子は、まるで神のようである。

さらに、次の場面にも注目したい。

次の瞬間だった。突如、ぼとりと血を滴らせたような真紅に流水の一点が滲んだ。あるいは、氷原の底から、真紅の血が滲み出たと言つてよかった。それは、あまりにも思いがけない情景だった。（略）

またしても、ぼとりと、血の滴るように流水が滲んで行く。

（天からの血！）

そう思った瞬間、陽子は、キリストが十字架に流されたという血潮を、今日の前に魅せられているような、深い感動を覚えた。（略）

先程まで容易に信じ得なかった神の实在が、突如として、何の抵抗もなく信じられた。このされざれとした流水の源が、血の滴りのように染まり、野火のように燃えるのを見た時、陽子の内部にも、突如、燃える流水に呼応するような変化が起ったのだ。

これは『続水点』のクライマックスで、陽子が「燃える流水」を見つめる場面だ。この場面は陽子の凍った心が、太陽、すなわちキリストの血によって溶かされたものと考えられる。しかし、この場面が意味するものはそれだけではない。結論から先にいえば、陽子の〈洗礼〉の儀式を表しているのではないか。

『新カトリック大事典』において、洗礼は、次のように説明され

ている。

父と子の聖霊の名によって人を水で洗うことにより授けられるキリスト教の根本的な入信の秘跡。水で体を洗うことは、清めをもたらず儀式として多くの宗教で行われている。(略) 洗礼は水洗いの儀式であるから、それによって直接に示されるのは心の清めである。洗礼は、悔い改めてそれを受ける人に、あらゆる罪の完全なゆるしをもたらず。

洗礼には、「水」が欠かせないのである。さらに太陽は、『キリスト教シンボル辞典』¹⁰によると、「受肉した御言葉であるキリスト」である。つまり「燃える流水」は、洗礼のための水と、キリストの姿を表わしたものと考えて不自然ではない。陽子は『氷点』『続氷点』の中で、辰子の力を借りながら、〈原罪〉を認識し、〈赦し〉を知った。『氷点』『続氷点』は、陽子が信仰に至るまでを丁寧を描いた〈洗礼〉の物語であると言えよう。

三 時代と『氷点』

ここでは『氷点』がベストセラーとなった理由について、時代背景とともに考察する。藤井淑禎は、ベストセラーの調査方法について以下のように述べている。

「全国ベスト・セラーズ」のようにここ二、三年間の新刊書に限定しては本当の出版・購入傾向はわからず、その意味では『読書世論調査』の「あなたの店でもっともよく売れた書籍

は」のランキング、「あなたが最近買った書籍は何ですか」のランキング、こそが有効だったのである。(略)

ただ、そうするにしても、「あなたが最近買った書籍は」と「読まれた本」とのあいだには大きな距離がある。言うまでもなく、借りて読んだ本がここにはカウントされていないからである。そして、「読まれた本」＝「買って読んだ本」と「借りて読んだ本」の合計、を示す資料が、ひよっとすると、この世には存在しないかもしれないのである。

ここで浮上してくるのが、その代用品としての、『読書世論調査』中の、「この一年間で読んだ書籍のうちでよいと思ったものは」のアンケート結果である。これには、購入することなく読んだものも含まれているので、相応の価値がある。

藤井が述べるように、『出版年鑑』（出版ニュース社）にまとめられた「全国ベスト・セラーズ」は、新刊書のみを対象としているため、刊行から時間がたった書籍はランクインしない。また、高度経済成長期は貸本屋で本を借りる場合も多く、「売れた本」だけを調査しても意味がない。特に『氷点』は、初出が新聞小説という特性上、「売れた本」のランキングだけではその人気ぶりを確かめることはできない。よって、『読書世論調査』（毎日新聞社）の「この一年間で読んだ書籍のうちでよいと思ったものは」という質問ならば、買った・借りた・新聞で読んだ、に拘わらず、純粋な『氷点』の人氣を確かめることができるというわけだ。

早速『読書世論調査』を用いて、『氷点』ブームの背景を探っていく。なお、『氷点』は一九六五年の十一月に刊行された。一九六

よいと思った本

(1966年度)

順位	書籍名	全体 (人)	男 (人)	女 (人)
1	氷点	62	14	48
2	徳川家康	37	26	11
3	人間革命	31	13	18
4	戦争と平和	29	11	18
5	風と共に去りぬ	20	6	14
6	大地	18	10	8
〃	嵐が丘	18	7	11
8	天皇ヒロヒト	16	14	2
9	こころ	15	7	8
10	友情	14	9	5
〃	ジェーン・エア	14	—	14
12	海軍主計大尉小泉信吉	13	9	4
〃	赤と黒	13	7	6
〃	誰がために鐘はなる	13	4	9
15	車輪の下	11	2	9
〃	女の一生 (モーパッサン)	11	—	11
17	日本の歴史 (中央公論社)	10	8	2
〃	坊っちゃん	10	7	3
〃	宮本武蔵	10	6	4
〃	罪と罰	10	4	6
21	白い巨塔	9	2	7
22	ジャン・クリストフ	8	3	5
〃	女の一生 (山本有三)	8	—	8
24	路傍の石	7	3	4
〃	アンナ・カレーニナ	7	1	6
26	山本五十六	6	6	—
〃	三国志	6	6	—
〃	沈黙	6	3	3
〃	次郎物語	6	3	3
〃	愛と死をみつめて	6	1	5
〃	若きウェルテルの悩み	6	1	5
〃	対話 人間の建設	6	2	4

五年度の調査は同年九月に行われたため、今回は一九六六年度の「この一年間に読んだ本のうち、よいと思ったものの書名をあげてください」の結果に注目する。¹²⁾

このように一九六六年度は、当時の大ベストセラー『徳川家康』に大差をつけ、『氷点』が一位となっている。では、三位以下の書籍をざっと見てみる。すると、戦争文学、歴史・伝記、純文学がほとんどであることが分かり、当時読まれていた本は大抵が〈硬いもの〉であったことが窺える。一方、一般の主婦が書いた『氷点』には、親しみやすさ、面白さがある。そのため、〈硬い文学〉や〈難解な文学〉には踏み切れない読者層を一気に獲得できたことが予想される。

さらにこの表を細かく見て行くと、女性だけの結果では『氷点』が断トツで一位であるのに対し、男性のみの結果では、『徳川家康』にその座を奪われていることが分かる。

『氷点』の支持者六二名の内、実に八割近くが女性なのだ。これは『氷点』ブームの要因を探る上で無視することのできない事実だろう。ではなぜ『氷点』はこれほどまでに女性の読者を獲得することができたのか。

藤井淑禎は、『氷点』ブームと同時期に人気を誇ったモーパッサンの『女の一生』を中心に、高度経済成長期（藤井の著書の中においては一九五〇〜七〇年頃を指す）の女性の読書についてこう述べている。¹³⁾

これからの女性はどうかあるべきか、は、軍国主義の克服と並んで、戦後の日本人が直面させられた大問題だった。そのヒントを得るために、当事者である女性たちを中心に大挙して書物に向かったというわけだが、なかでもさまざまな名作の中のヒロインたちの生き方は、戦前の男性中心主義や封建的家父長制度、さらには恋愛や結婚への過干渉を乗り越えようとしてあるべき姿を探しあぐねていた戦後日本の女性たちにとって、かつここの参考材料であり、時にはお手本となった。

『氷点』ブームの当時、女性は文学の中に人生の「お手本」を求めていたというわけである。先にも述べたように、辰子は作中人物にとっても読者にとっても、目標となるような魅力的な女性であった。また、逆境にめげない陽子の姿に心を打たれた読者も多いはずだ。陽子・辰子という、生き方の手本とも言える魅力的な登場人物、そして親しみやすさ、この二点が、高度経済成長期の女性の心を掴み、『氷点』ブームが巻き起こったのだと言えよう。

おわりに

ここまで論じてきて言えることは、作者の意図とブームの要因は、全く異なっているということだ。三浦綾子は、『氷点』について次のように語っている¹⁴⁾。

陽子も神のほうを向いてはいなかったのである。これらの人間たちを理解することで私は人間の持つもう一方の善意、神を信じる精神を知ってもらいたかったのである。

しかし、三浦のこの意図は読者に伝わらなかった。陽子の、自分にだけは罪がない、と思う傲慢さは留意されず、読者はむしろその人格に惹かれた。

つまり、『氷点』ブームは、作者と読者のすれ違いに要因があるのだ。作者は〈原罪〉、そして〈赦し〉を『氷点』『続氷点』で表現しようとした。しかし、一般人への伝道を意識しすぎるあまり、その内容は、分かりやすさ、親しみやすさへ傾きすぎてしまった。結果、夏枝や村井、啓造らは、姦通や嫉妬など、自らの意志で犯す〈自罪〉に苦しむ者たちとして描かれ、〈原罪〉に直面する人物は陽子のみとなったのである。

『氷点』は従来、〈原罪〉が曖昧になっていると論じられてきた。しかし『氷点』の価値は〈原罪〉にはない。むしろ、〈原罪〉が曖昧になったことにより、共感のしやすい〈自罪〉が提示されたこと、当時の女性たちの求める目標としての登場人物を偶然にも提示できたことにより、『氷点』ブームが沸き起こったと言えるのではないだろうか。

注(1) 黒古一夫『三浦綾子論——「愛」と「生きること」の意味』小学館、一九九四・六

(2) 尾崎秀樹「三浦綾子「氷点」・視聴覚時代の懸賞小説——戦後ベストセラ―物語―70」『朝日ジャーナル』第九卷九号、一九六七・二二

(3) 三浦綾子『命ある限り』角川書店、一九九九・六

(4) (2)に同じ。

(5) (2)に同じ。

(6) (1)に同じ。

(7) 上野英信編『近代民衆の記録——鉦夫』新人物往來社、一九七—

(8) 学校法人上智学院新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』研究社、一九九八・一

(9) (2)に同じ。

(10) ミシエル・ワイエ『キリスト教シンボル事典』白水社、二〇〇六・一

(11) 藤井淑禎『高度成長期に愛された本たち』岩波書店、二〇〇九・二二

(12) 『読書世論調査1970年版』(毎日新聞社、一九七〇・九)は次のような方法で調査されたものである。

・調査のあらまし

国民の読書傾向を知るため、毎年九月か十月、読書週間前に、世論調査の方式をとって、全国的に調べる。

・調査対象の選び方

満十六歳以上の男女を対象とし、各調査対象の選定は層化二段無作為抽出法によった。まず、離島、僻地を除いた全国三四〇〇余の市区町村を、北九州市を含む七大都市とその他の市(市部)および郡部に大別したうえ、人口数や地域性、政治色などにより、層別した。さらに、これら市区町村のなかで一つ以上の行政単位区(字、丁目、学校区など)を選び出して調査地点とした。このようにして選んだ調査市区町村の単位区(調査地点)で、こんどは住民登録簿から、満一六歳以上の男女を一定間隔で抜き出して調査対象とした。全国の満一六歳以上の男女は七千万人前後であるから、この標本はその約一万分の一の縮図ということになる。

・対象数・回収数

一九六六年度の調査対象数は六九九九、回収数は五四九九。回収率七八・二パーセント。

(13) 藤井淑禎『名作がくれた勇気 戦後読書ブームと日本人』平凡社、二

〇二二・八

(14) 三浦綾子「私はなぜ『氷点』を書いたか?」(『女性自身』光文社、一九六六・四・一八)

〈付記〉『氷点』『続氷点』よりの引用は、『三浦綾子全集』第一巻(主婦の友社、

一九九一・七)、第四卷(一九九一・二二)による。